「第８回 日本女性学習財団 未来大賞」全体講評

「日本女性学習財団 未来大賞」は、今年度で８回目を迎えました。前身のレポート募集事業から数えると、31 回目の募集となります。

今回の応募者は個人 24 件とグループ３件でした。個人は 10 代から 80 代まで幅広い年齢層の方に応募していただきました。居住地も北海道から鹿児島まで広がっており、なかには地方に暮らす女性の生きづらさを感じさせるレポートもありました。

これらのなかから厳正な審査の結果、大賞には、佐藤有理さんの「『産まなければならない』の呪縛への道のりと解放―次世代の女性たちへのメッセージ―」が選ばれました。審査員からは「ジェンダー課題の根源に向き合っている」「ジェンダー規範からもがきながら抜け出す様が、生々しく伝わってくる」「多くの女性たちが語り合うきっかけとなる作品」といった論評が寄せられました。当事者でなければ紡ぎだせない言葉が、読み手の心を動かし、気づきをもたらしてくれるレポートです。

最終選考には、大賞受賞作のほかに 2 点が残りました。

ひとつは、10 代の大学生の作品「生理用品無償提供から始まるだれもが生きやすい社会」です。重度の月経困難症に悩んだ経験をもとに、高校時代から生理用品の無償提供の運動を始め、生理について語る場をつくってきました。大学進学後も活動を続け、生理に関する講義も受け持ちます。初潮を赤飯で祝う文化を問い直すため、赤飯のおにぎりを授業のなかで配るなど、そのアイデアと行動力には目を見張ります。「日本社会で生理に関して語ることが忌避されてきたなか、大きなチャレンジだ」「生理に関する社会的スティグマを自らの経験を通して語っている」と、審査員から評価されました。

もうひとつの作品は「学び直して開けた道、次の世代にバトンを繋ぐ」、地方に住む 60 代の女性からの応募作です。夫が社長を務める老舗呉服店が経営破綻し、夫が死去するという出来事に襲われます。そこから経済的自立を目指して高校教員免許を取得して地元高校へ就職、その後、教育格差を埋めたいと無料塾の開設…と波乱に富んだ人生ながら、たくましく「再出発」を重ねて道を拓いていきます。ジェンダー格差が大きい地方で、因習と闘う姿、そして自ら学び続けながら次世代を育てる姿勢が、高く評価されました。

このほか、子育てをしながら転職に挑戦したり、妊娠中に大学院を受験したりと、「妊娠出産したら何かをあきらめなければいけない」という社会常識を吹き飛ばす作品も複数寄せられました。また定年を迎える均等法世代の「心の声」を綴る、変化の波頭をとらえた作品もありました。独自性の光るものとしては、40 代男性から寄せられた「男性の生理リテラシーの向上」を提言するレポートが挙げられます。

なお、「出発・再出発」を生き生きと描きながらも「残念ながら、ジェンダー視点が弱い」と評される作品もいくつかあり、今後のブラッシュアップが期待されます。

今回も、たくさんのご応募ありがとうございました。今回の受賞レポートを手に、みなさんそれぞれが学びを深め、そして語り学び合う場が広がることを願っています。

「第８回 日本女性学習財団 未来大賞」選考委員会